今日のイラスト 281　「 イラストでたどる萩往還③　悴坂ー里塚 」　　古谷眞之助

イラストでたどる萩往還 03

悴坂一里塚

文・イラスト＝古谷眞之助

萩往還を歩いて最初に出会う一里塚（萩藩では一里山とも言った）は、「道の駅萩往還」近くにある悴坂一里塚である。積み上げた玄武岩の上に土を盛った塚の中央に、かつては高さ一間、五寸角の塚木が建てられ、唐樋札場からと三田尻までの路程が記されていた。現在のものは石製で、昭和14年に萩市が建てた。

ところで、萩往還は一般的に十二里、約53キロメートルと言われているので尺貫法とメートル法の換算が合わないと思われる方も多いだろう。実は萩藩では検地の際に一間を六尺ではなく六尺五寸（197センチメートル）としていた。そのため一里（2160間）は約4・3キロメートルになり、ほぼ辻褄は合うのである。

萩往還沿いの遺跡の一つに一里塚がある。萩藩では玄武岩を積み上げて塚を作り、それがあたかも小山の体を成していたことから一里山とも呼ばれた。萩往還内のその位置は、街道絵図「行程記」を見れば、ほぼ正確に知ることができる。私の住む山口市大内地区の氷上にもあったと記録されているが、今はその片鱗も残っていない。現在、復元されたものも含めて残っているのは、悴坂、中の垰下、市頭、上長瀬、一の坂の 5 つである。ところで、萩往還の長さは公称「約 53km」同時に「12 里」と色々な書物に書かれている。一般的に 1 里は約 4km だから、メートル法と尺貫法との辻褄が合わないけれども、そのカラクリは本文に書いているとおりである。実はもう一つ書いておきたいことがあったのだが、字数が足りなかった。追記しておきたかったことは、絵図に書かれた一里塚の間隔である。萩から 8 番目の氷上までの一里塚の位置を絵図から現在の地形図に落として、その間隔を凡その目分量で計測してみると以下のようになった。もちろん単位はキロメートルである。「唐樋札場-4.6-悴坂-4.0-明木-4.7-中の垰下-4.3-市頭-5.1-上長瀬-3.6-一の坂-4.0-天花-5.2-氷上」最短 3.6km 最長 5.2km だから、かなりいい加減と言うか、当時の測量技術のレベルが知れると言うものだろう。シーボルトがその正確性を絶賛したという伊能忠敬の大日本沿海輿地全図が完成したのが 1800 年、「行程記」が描かれたのが 1760 年代と言われているから、まだまだ地図の正確性については望むべくもなかったというべきか。山口県が誇る江戸期の絵図「行程記」だが、この絵図は縮尺 1/7,800 で萩から江戸・品川までを描いており、その長さは実に 120m にもなる。作成の中心人物は萩藩郡方地理図師・有馬喜惣太だった。彼は 1767 年にも、国の重要文化財の指定を受けている萩藩立体模型図「防長土図」を完成させている。こちらは現在の地形図 1/25,000 とほぼ同じ縮尺で、縦 3m 横 5m もあり、県立博物館で実物を見た時にはその大きさ、その正確性に驚いた。彼こそ地図作りの天才と言って良い人物だろう。地図作りの功績により有馬は 55 歳にしてやっと 15 石の武士に取り上げられているが、彼のお陰で萩藩は、城下町だけでなく藩内の絵図が全て揃う我が国でも稀有の地図王国となったのである。（2019.6.26 記 ）